

俳諧古今抄

再撰貞享式  
日之三

5  
922  
3

















所り法あり或は後の二句とありからあり可  
と所り法ありとらふと可と昔法場の二句  
に用くす此二句と所れいふ事なきと方印書  
の書あり昔法の新サコ子集とらふ事わかく  
も裁の可せす法ありと所り法ありといふ  
ふまれの事ありと可と推してその所實の  
口誦とけりいふらふ事

○ 季子節の踏くる物也事

むらう季子節の物とす物もさる事と昔法と秋冬

とありいふ事ありといふこといふ種々の法あり  
而もこれと法ありとらふ事ありとらふ事ありと減  
少とと場ありといふ事ありとありといふ人  
の私より一とありとありの二季と法ありと入  
心心のありと神神者事。入のありとありといふ運  
とついでとありと秋ととありといふ今此能階の者此  
とついでとありと法ありといふ事ありといふ  
いふ事ありといふ事ありといふ事ありといふ  
といふ事ありといふ事ありといふ事ありといふ  
といふ事ありといふ事ありといふ事ありといふ  
といふ事ありといふ事ありといふ事ありといふ











九ノ本巻三  
カ  
れ和の二角ありて能清よりよく各目あれは二季  
とほれてを二季より用一季とを二季とを二季  
とより節供の名目とありて秋に桂物  
の去嫌おほく蓄きよとこしるは秋かかん  
これと未然のらんは二季とを二季とを二季とを二季  
こまき古抄のなまきり句論とて楽よ上下  
の二季とこしり能くみとこしり能くみとこしり能く  
とつて請るとつてま秋のまよのあねとて此  
首法より時とこしり能くみとこしり能くみとこしり能く  
は用一季と折れよやのまよとこしり能くみとこしり能く

のおもたせられしもなまきり各目とて四まきれ  
差ふとありしきりられしなまきりもはなまきり  
秋ありはなまきりとて冬よりありて諸社の臨時  
のこまきり各目ありはなまきりなまきりなまきりなまきり  
此用やもや貴野のこまきり寒の暑よりなり礼と  
はなまきり知のあまきりて節供節日のまよとて他清  
より多用されしなまきり二世の夏議よりなりて時  
こまきのまよはなまきりてなまきり用や一ひとよ  
他諸の用ちりなまきりなまきりなまきりなまきりなまきり  
冬と定されしなまきりなまきり各目のおほく當時

古今抄巻三











○ 年とありし新とある物共事

むより連記の式より順序しておの各とあるは  
おどろく一名とありし年とありしは同様にあり  
又句とありしはこれと異なりはらへ合ふは句  
の害とある時もおぼしめし合ふは能潜の書秋を  
例のみ句とありしは年とありしは句とありし  
て各月の趣重と論とに異なりはこれとありし  
ありて年とありしはこれとありしは年とありし  
のし中に○をとりて年とありしは年とありし

よ敷きありしは年とありしは年とありしは年とありし  
るありしは年とありしは年とありしは年とありし  
浮葉の新とありしは年とありしは年とありし  
は年とありしは年とありしは年とありしは年とありし  
わらわら新とありしは年とありしは年とありしは年とありし  
くも水とありしは年とありしは年とありしは年とありし  
りよとありしは年とありしは年とありしは年とありし  
れおぼしめしは年とありしは年とありしは年とありし  
ありしは年とありしは年とありしは年とありしは年とありし  
あれしは年とありしは年とありしは年とありしは年とありし



と新とて。さあときらぬ。○夏と朝日此  
 以燈より裕單物扇團扇佳水とむきあし酒と  
 おへて古抄ありとあされとこれの佳涼と結とれ  
 いと詞も及さん古抄を汗と新とてこれとそ  
 ら各向うしま向うもよと船漕の手話とあれい  
 これと二用の第一とらむ川持とて二季も流り  
 て中遊の對あれい季子も新も用とて○秋を  
 灯籠とよみありゆゆと決て盆の季或あれ  
 灯籠とついでりてと季も新も用とて一燈は  
 も成放しとら秋とけとまりていとと放とて

例の二用さんさるに州遊とて詞いざら川持  
 の名おあうと季向の新と句端とて季秋の  
 二季  
 二用とてと例の案議よりとて○冬と  
 扇  
 扇裏より燈火と海とちると古抄とおふと  
 する金富の二用よりと時と辰ととお方とてか  
 ます一櫓とがより冬とあうと山家此用と新とて  
 燈火とてとを代の赤とて金持子と句解と  
 扇  
 扇とこれと燈火と扇團踏皮紙の中のおとて二用  
 とありとて古抄ありと冬とけとてととと扇帽子  
 とてと新とてとて用ありとてとてとてとてと







こらふとありて連絶もも名と併く一々此絶  
よとて保と新の各句とを海くの内より  
四季の節をよの曲節とて一〇今梅とて  
各所と新の各句をよの所の名とて  
その同系の情とて一〇書季と後  
とて一〇字情の各句とて一〇書季と後  
とて一〇字情の各句とて一〇書季と後

あまのつとと後手つとぬえ片  
かくとて保と新の各句とを海くの内より  
そのおれももらつとて一〇書季と後

伊賀よゆりつと馬の各鞍うちがらつて

からあつと保つと坂と後馬哉

け時らるはれのおれ前のおとらぬ牛もある地  
とて一〇字情の各句とて一〇書季と後  
よのつとて保と新の各句とを海くの内より  
とて一〇字情の各句とて一〇書季と後  
あつとて保つと坂と後馬哉

かへはつと南ぬらつとげよ治

け句らつと保と新の各句とを海くの内より  
源氏よと保と新の各句とを海くの内より



と扱てかくし置かれし御筆を昔おぼえしむりて  
次ニありし此用はあつとされしと新解の事  
心むる各取ははかして作しおぼえしむりあま  
あつとすし及りしと又あると老懐の詩毫一

年くや猿まきせし猿の面

け句らぬりし御筆のこととあつと扱する  
歳旦の詞あつれいそと新解の事心むる  
可き格とや心むるれは新との心新解の  
心可き格と今の新制とてこれと今  
の御筆の名目とてあつと扱

蓮二玉け照のおほむねい白馬の類説し想あり  
て先師の遺稿も甚なとりてと先師の人和  
り御筆の御筆も軍書しと先師の御筆と  
向ふし時のおりし新解ありし御筆の詞は  
故書と富士法師の今對して我は一唱の  
作ありしと貞を老人此とてと先師の  
はくると各句あつとせとおそりし御筆の  
とつととと家の人ととと御筆の御筆  
と所んら跡と解しとるれと御筆の御筆  
いけ新と扱されし御筆の詞と御筆



富士とむきとおろるく芳野とむきとおろる  
一むきう今とにけの香とおとつる  
一能及の腕力とおとつる所牙のまじり  
一これい授名のおとつる一とらげはせを介  
新向も新野も先師の遺行よとありくあら  
中へ樹まや又殊のちよ此美と舞踊ぬん  
くま各のまや、意の山け二句と笑の金味  
一とる百の撰集よは一や新之部とこれ  
一うふ草と天の橋まの各よあふ又殊のや  
とたありせ後草とまよのうふ名にひき

越中と謎語とふとる也但子求めらと越中  
のまよといひおの湯殿とまよとたおあ  
くも集よと意と部ありく一海よまの牛  
もあそ一棉車ぬとまよと鏡と意のこり具  
け二句よと意ありく一おのち女意とありて  
先師の句あり後へ傾城意とありて秋と坊  
作ありも集の部まよとたと集よあ一内  
これと和語よ此件ある一おあく新之部  
のまよといひ、樹まやのまよとありて一そまよ  
けるら獅子居のと詠ありく一とらねよまよと



「さるものさるらる作の形容ある」とも世  
に例の象議ありて新解の一格とあるなり  
まゝに象議永の初比あるに湖南の新説の  
象ありて七浦や二子の象と一子はくとも  
象句ありし時のに保より比我門の能事  
各射し新の何はあれとされしと新の味  
かしく保て新解し何とせし句をこの時  
こそも子此服とほけて口を格もつよ一子  
はれと象の減後よりくくしくわが新製  
あれを駢と空より日あるんを一子此

象保より今日の操おとらさんとし象の服  
より保しけ解とやあるとくも也▲之授  
まゝに先師の没後新の味も子も空かく  
おれりの議論と相ゆる中よ名もあは長良の  
特川宮より口を子の特解とよ象とくも  
解自ハ新の特解とよ象とくも  
くもくも世の特の子此 蓮二もかくら  
はれと角ひとけい又新の特解と新説  
飼字のまをともよ時とくもくも新  
とありしかくはくもくも象の解自は



ハ新のふゝ忍名あつしんきよよあまどれんきや句  
と服と起まの二格とい用あつしんきよ一様と相  
と起し口こじきりけれい短字いといつしき句  
の向よびりてふらねよ新おの新あんと一様  
の要評らりてきりぬかくりい七種の言も  
け服の録の相もき句を時の奥いきりてし  
かくしきとけれと服よ書用のけりきあんと  
授きりも服のけりあんとけりきあんと  
あつしんきよといけり又と等しきといあつしん  
今此之類あつしんけりい此類あつしんけりい

おれりの名目ともおれりといふやおれり  
と和号此公論あれり也

○四季の名類此事

中右より四季の名実とお月むね嚏軒と申して  
し書け抄し用おれりともお月くを家くの音用  
てて通用あつしぬお月いされい様中に行事  
しり四季の季を論し神祉御園の行法し  
る本も然の名類し先ら嚏軒よりよきや  
あつしん嚏軒を例し此類の用らりり連寄



の附合と鑑としていつくけりてありの用とある  
物名もあまこゝあるに今此能潜は用あるに物と  
時代の用捨にやうきとまじりしやけあふけ本を  
古今論ある物とあけて今捨つることを加へ  
し也稱うくら我にふるま達の人ありてけりふ  
名れと凡例とありに月えりより十二月廿四日  
まゝ彼ら小噺竹と用けりて季細の式目も  
あつてもやとせらるけ式の制表するふと或<sup>か</sup>書<sup>る</sup>  
しと秋冬と二季の向ふやうきくる物い多き  
とあつし少きと加へておれと今式の加減と

し或と鉢裏と江籠とついで良き者と服類とつ  
おとなれと今式の備わつし或と新舊違  
秋とあし花よ時季とまじりあつるハおれと今式  
の貴賤とついで或と右おのすし用とけり今式の  
有用とあるおれと今式の蓄用とつりり年竟と  
新故のきとついで例の古式とわくつとあつて  
これと温故知新とやうきまじりあつて  
連年季の両式より兼載京祇の控はいろまじ  
りて紹巴の又百ヶ條ありて雪雲とあつて  
まじりてはくつとつと目よ厚ふおんかかん



し千系一斬の解ありて一か下通のると云ふ  
何のなるべきはうある何の向きやうあると  
一部の凡例と云ふべき也二之子てんたの跡と  
とあふと能活ハ例の事話ちんりてはなす付  
の象の諫と云ふは世よ人の象の諫の中と也  
まのく此用と違ふべき也

○春之部

節御食

世名ハ佳節ノ御食礼ナリト云フ月ノ初御食  
ヨリ節事氏節人氏御食子ノ田各ノ俗習月

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ禱ノ自衣ノ威儀ヲ止テ  
臨時ノ遊ヲ云フトリ或ハ朝御ト云フ詞ヲ云フ  
人ハ節ノ詞ト成ル世等ノ俗習ヲモ知ナリ本  
ヨリ能諧ノ世法ナリ諸國ノ俗諺ヲ知悉スレ

決雪

世名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云ク中世ハ  
冬ト云フリ○今接スレニ決雪ハ冬ニ用キ所以  
ナリ雪ノ班ナリ形容ハ初雪氏云ク薄雪氏云ハ  
春ノ雪ノ平白ナラシモ日影ニ散リテ決雪ナラシモ  
寒ノ氣ノ決和ナリ故ナリハ決雪ハ決レテ春日ト定レ  
世等ハ例ノ加減氏例ノ當用氏云一キナリ



雪解

竹詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪  
消テ凡消カレ凡朝夕ノ日ニ結ヒ洗足ノ湯ニ  
結タラニ頑ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合  
ノ害ト成ル時アラシク多ニ解ルヲ春ト成シ消ルヲ  
冬ト成ス時ハ消ル物ニ敵シテ消ハ解ル我ト解  
ル故ニ冬ニ春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ  
得テ凡等ヲ當用ノ働トヤ云ハシ去レト冬ニ却  
ニハ断ルニ及ハス

陽火

此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アレト  
燃ルト詞ヲ添ヘス凡味シテ春ト定キナリ蜂カケロフ

稲妻ノ説ハ連身ノ用ニシテ蜻蛉ノ説ハ節子ノ  
沙汰ニヤ○今採スル物ノ散回ハチラメク毳羽目ノニ字ヲ用  
テ同訓別用ト成スヘキナリ毳羽ハ木コカケ蔭ノ毳羽ヲ伝  
習ハフヒノ田各語ナリ或ハ耻羽目ト云フ類ナリ然レ  
ハ散回モ群ムラツク尽モ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用  
トハ凡等ノ為ナリ或ハ莊子ノ野馬遊ユウ奔ラシテ  
遊糸モ陽火モ同意ノ説アレト漢語ノ遊糸ハ倭  
語ノ用ニ非ス増テ野馬ヤハヲ以テ野馬ノ説ハ何ノ俗習  
ニヤ論スル足ラス或ハ斜遊トハ湯桶訓ニテ和訓  
モ例ノ覺束ナク斜遊トハ連歌ノ詞ニテ何レモ







若葉

古式ニ木ノ若葉ハ夏ト成シ早ノ若葉ハ春ト成シ青葉ハ總テ新ト成セルカナリ然レテ或抄ニ花ト若葉ノ二叶ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ夏氏云ル何故ニ決テ又ヤ○今按スルニ月花ハ凡雅ニ一巻ノ飾ナレハ踏タレ物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配一レハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ夏ト定一レ○猶按スルニ世配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ヨリ秋ナラ其子葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ夏ト成セルコリ若芽ノ春ナル道理ヲモ知レ然レハ花ハ春夏ニ跨テ花ニ郭ムラ結タルトハ入遠タル御テ世等

ラ加減ノ機ニ夏トハ云一ナナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レ任残字ハ其季ヨリ世季ニ残字ハ残ト云ル道理ナレ花ハ本ヨリ春ニ決シテ残ハ夏ト定一レ惣シテ残葉残葉ノ類モ古式ハ一様ナラ又故ニ叶ハ十色ニ首葉ヲ百世ニ論ノ断ル時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残レ任残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬ニ部ニ奉ルニ世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成シ歌ニ杜若ヲ春日ト成セト中古ニ誹諧ノ加減

牡丹杜若



ヨリニ各ヲ夏ニ用スニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤ナリ又ヤ山階

ノ向情ニ殊ニ面白キ物ナリニ界ハ決シテ夏ト定ムレト去レト落ルトハ詩ノ詞ニテ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ譬ハ桐葉ノ重ク落テ彼ハ散ル姿ニ非ス多ニ姿情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ多ニ明ナルレ

水芙蓉

此各ハ新撰ナリ芙蓉ハ和漢氏ニ秋ノ節ニ入レト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名トワ然レハ條ニ和ケテ水芙蓉ト續ス氏芙蓉ト云フ水

ヲ結スル散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用ナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナリト云フ此類ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レ氏老萱トハ本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱氏乱萱氏總テ暮春ノ物ナレト例ニ今式ハ加減ヨリ殊萱ハ勿論ニテ老萱モ夏ノ名ト成寸ハ萱ニ老ノ感情アリ凡雅ハ例ノ林敷味ト云ヒ此各ハ夏語ニ據ルキナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今按スルニ萱附子ハ春葉立テ夏詞ハ六月ノ間ニモヲ替テ冬



至ノ比ニ鳴習フ故ニ管ノ子ニ鳴字ヲ結テ冬ノ季  
トハ成セルナリ然レハ管ハ向習ニテ或ハ引鳥ノ  
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ之誓古ハ管  
ノ向ナレハ附子ハ決シテ管ト云イ笛ヲ結テモ管ト  
知レ月星日ナリト引声ヲ最上ノ管トセリ

鳥巢

鳥巢ニハ鶏ト都鳥トナ加テ水鳥ハ總テ冬ノ季ト  
世ニ鳥ハ歌道ノ秘直ナレハ冬ニ記サスト書捨テ  
例ノ子細モナク新ナリト云ヘリ○今接スルニ都鳥ハ  
指テ能語ノ用ニ非ス増テ秘直ナレハ論ニ及ハス鷓  
ト云イ鷓ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アレハ巢ヲ結テハ

夏ト云スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セル  
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ擲メハ水ノ増減ニ浮沈テ四季ノ  
モ其候ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新ト成セルト鳥  
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ管ナレハ  
浮巢ハ決シテ管ト定キヤ巢ニ用ナキハ向作ニ  
依ルレ鳥ノ別名ハ冬ノ季ニ論アリ

翡翠

此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト夏ノ谷  
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ管ト云ハ川蟬トナリ

沖鱒

此名ハ俗習ナリ或ハ海邊ノ別在リ或ハ船遊  
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ稱スレハ決シテ極暑ノ各月



ニテ世等ヲ例ノ貴賤ト云キナリ

況 世ニ只ハ草家ノ式同ニ多ハ秋ノ季ト感セルハ  
案スルニ世ノ字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ思ム天地自然ノ道理ニシテ世等ハ甘夏ト決シ  
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ姿情ヲ論スシテ又字  
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋之部

花白田

佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ空牙段生スハ種ニ  
理屈トト世分ニテ置カ能ナリト云ヘリ如何ナル

秘古又ミヤ知ラス○今採スルニ花壇モ花白田モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ  
仰向キ白田トハ俯向ク多ク能諧ノ次ナト云テ種々  
ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス世等ヲ今式ノ有用ト知レ

桂花

世名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春季ノ説モアトト  
地下ノ桂ハ花ノ角ナリ和歌モ月ノ光ヲ讀タレ

例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ  
四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ  
有明 既望ノ名ニ例シテ月モ星モ二句去ク植物  
ニモ二句去キナリ



鳥籠橋 古抄ニ生類ニ非ス、  
如河鳥ニ百去キリ 鳩吹 此詞ハ種々ノ説アリト

紅葉散 此詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリヲ  
冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ苦ナリ増テ

冬散ルハ木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ此等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニ及向敷ナリ

柏散 此柏ハ鳥籠ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文トシ  
トト定キナリ

秋ト定キナリ ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正諺ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ

ト訓シテ此類ノ正俗ハ教多ナレト知テ誤ニ從フラ

固凡ノ故實トハ云レ去ナカラ爾報ノ註ニ榧有テ美

實ニ而如栢トアレハ倭モ榧テハ榧字ヲモ用ニ榧ト

栢トハ異字同訓ト云レ或ハ倭傘ノ設ニハ紅葉セ

故ニト云レト桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季

ナリ物シテ我家ノ貞名遣ハ新字俗字ノ二論

ヨリ古今ノ兩用モ正諺ノ二様モ他語ハ例ノ俗ヨリ

從テ今日ノ用ヲ違スヘキナリ



推榿栢

御筆ノ推下ニ紅葉セ又木ナレ氏推トハカリモ秋  
ナリ或ハ葉モ世木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細  
ヲ叙セス然レハ栢トハ入遠テ彼ヲ類トシ是ヲ秋ト也  
百世惑心トハ世謂ナリ○今按スルニ推モ榿モ栢葉ノ  
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ  
實ヲ結テ秋ナルヲ運實ヲモ甘夏ナリト云レハ古抄ハ  
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

世式ハ例ハ貴散ナリ奈何トナレハ新ハ冬ニ  
テ食フハ秋ナル前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ  
茶ヲ摘ムハ春ニテ新茶ハ頂次ニ甘夏ト成セル速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誡モ其時其物  
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好ムトフ

初鴨

世名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散ニ加減トモ云ハ  
○今按スルニ奉膳式ニモ一鴨ト並ナカラ貴スル

一取ハ秋冬ノ差別ナリ去氏見角ノ姿情ヲ論ハ初  
ト云ハ凡雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハ凡味ヲ思フ多シ天眼氏  
天目氏云一辟言ハ初ト音ニ喚凡味ヲ出ニ思フヤ  
鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ初字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

世式ハ禁中ノ行事ニテ古式ニ世類ハ教多ナリト多  
連歌ノ用ニテ俳諧ノ平話ニ並用ナラシ然レ俳諧



下学上達ノ道ナレハ多クハ世等ノ一各ヲ奉テ公ニ承  
殿上ノ礼例ト成テハ四季ニハ世類ノ各ヲ透<sup>ス</sup>来テ作<sup>ル</sup>諸  
曲節ニ用ミトナリ去<sup>ル</sup>ハ野宮ハ後<sup>ニ</sup>遊ト賀<sup>ス</sup>茂トニ在リテ  
伴勢ノ齊<sup>ニ</sup>備<sup>フ</sup>宮ニ移リ玉<sup>フ</sup>ヲ野宮ノ別トハ云<sup>フ</sup>リト去<sup>ル</sup>ハ  
羅<sup>シ</sup>旅ニモ哀傷ニモ非<sup>ズ</sup>増<sup>ス</sup>テ意<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>常<sup>ニ</sup>モ非<sup>ズ</sup>テ哀  
ナル少<sup>ク</sup>モ多<sup>ク</sup>ケ<sup>レ</sup>ハナリ

○冬之部

枯尾花

世名ハ古今ニ論<sup>リ</sup>テ秋<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>イ<sup>ク</sup>冬<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>ト枯<sup>ル</sup>花<sup>ヲ</sup>  
結<sup>テ</sup>ハ冬<sup>ト</sup>定<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>冬<sup>ノ</sup>枯<sup>ル</sup>花<sup>ト</sup>成<sup>ル</sup>

冬ノ本ノ散<sup>ル</sup>ラ秋<sup>ト</sup>成<sup>セル</sup>散<sup>ル</sup>ハ冬<sup>アリ</sup>テ枯<sup>ル</sup>ハ冬<sup>ナキ</sup>  
故<sup>ナリ</sup>然<sup>レ</sup>ハ冬<sup>ノ</sup>草<sup>モ</sup>其<sup>ノ</sup>例<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>枯<sup>ル</sup>花<sup>ハ</sup>決<sup>シ</sup>テ冬<sup>ナリ</sup>

残葉

世名ハ諸抄ニ論<sup>リ</sup>テ佛<sup>ノ</sup>筆<sup>ハ</sup>重<sup>陽</sup>ニ残<sup>リ</sup>テ秋<sup>ナリ</sup>  
ナリト云<sup>レ</sup>ト桃<sup>モ</sup>草<sup>モ</sup>其<sup>ノ</sup>類<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>然<sup>レ</sup>ラ和<sup>歌</sup>

ノ公<sup>ホ</sup>ニ十月五日ヲ以<sup>テ</sup>残<sup>葉</sup>ノ草<sup>ト</sup>云<sup>レ</sup>ハ宮<sup>内</sup>字  
ニ及<sup>ハ</sup>スレテ決<sup>シ</sup>テ冬<sup>ト</sup>定<sup>シ</sup>世<sup>等</sup>ヲ加<sup>減</sup>ノ用<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>  
ハ<sup>ン</sup>残<sup>葉</sup>ノ字<sup>ハ</sup>總<sup>テ</sup>残<sup>花</sup>ノ例<sup>ニ</sup>效<sup>シ</sup>

竹鷲

世名ハ全<sup>ク</sup>富<sup>用</sup>ナリ古<sup>抄</sup>ハ秋<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>雁<sup>鳥</sup>部  
ニ入<sup>レ</sup>ト山<sup>雀</sup>日<sup>雀</sup>ノ類<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>テ竹<sup>鷲</sup>ノ  
物<sup>ニ</sup>連<sup>テ</sup>ス民<sup>家</sup>ノ軒<sup>ニ</sup>馴<sup>テ</sup>馬<sup>防</sup>ヲ傳<sup>ヒ</sup>中<sup>棚</sup>ニ



遊ユノ音ノ清スク久シハ殊ニ更ニ寒シレ増テ春日歸ル次女  
モ見子ハ決レテ冬ト定レルハ等テラ姿情ノ例ト云シ

### 木兔

木兔ミツツクモ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レルハ便鳥  
ニモ非ス名鳥ニモ非ス増テ鳴声ノ物ト建スハ冥クラ磨  
一レ故ニトヤ然ラスニ季ノ加減ト云イ夜鳴ク鳥ノ書用ト  
云イ決レテ冬ト定レルハ鳥ト部類ナカラテ新ト成セル  
ニ用アリテハ等ハ古抄ノ文覺ト称スレ

### 鴉

鴉カ鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ルラ古抄ハ渡鳥ノ部ニ入ル  
ト其名モ其言ノモ朝霜ノ氣色ト云イ秋ニ小鳥  
ノ多クレハ冬ノ部ニ跨リテハ名モ加減ト云キナリ

### 鳩

鳩ト鳥モ論セハ新撰ナリ海華ニ鴉ト下ニ鳩ト都鳥トラ  
加テ新式ニ新ト云ル歌道ノ秘ト夏ナリト書信テ例ニ  
其故ヲ曉サテハ今日ノ用ニ立テ難シ○今ハ梅スニ路鳥モ鳩  
モ水ニ甘ク冬ノ差別モ通レハ果ラ結スハ新トモ云ハケ  
シト鳩ハ鳴声モ寒ニ氣ニテ俗語ニ搔井云フナレ  
ハ能テ諸ニ名目ノ自在ヲ称レテ冬ニ用アラハ冬ニ  
用キヤ然ラハ路鳥ト部類ニ勝リテ例ノ新ト成リ  
系子ト成リテ附合ハ書用ト云キナリ

### 鴛鴦子

鴛鴦子ウヰ子ハ古抄ニリ啼子ヲ結テ冬ト成セトモ  
鴛鴦子トハ名目モ長ケレハ啼字ナクレ冬ト定



レ彼ハ冬至ノ此ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ノ用  
 ハナリ増テ嘗ノ母鳴ト云ハ子ノ字ニモ及向敷  
 仕名ハ俗習ヨリ鴨ハ往來ノ道ヲ定テ山ノ尾端  
 ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨  
 ヲ冬ト成セル各ハ殊ニ能諧ノ用ト云レ

尾越鴨

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ  
 總テ冬ナリト云レト去ルハ附合ノ室ヨリ綿  
 ハ本ヨリ新ニシテ綿入ハ綿扱ノ對ナレハ入字ヲ添テハ  
 冬ト定レ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲ摘ト云イ  
 棉ヲ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ  
 非スト云イ綿ニ海風腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透  
 ナレハ論ニカハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ昔  
 カラスト云テ蚕綿ト木棉トノ釈文アレト綿ト棉  
 トハ莫堅切ニテ音訓ニ替目ヲ又ヲ何故ニ附向ヲ  
 嫌ヌヤ古抄ニハ世類アリテ皆々論スルニ暇アラス  
 多ニ世綿ノ一名ヲ奉テ一カ法ノ凡例ト成サハ其外ハ  
 推レテ知一キ古又ナリ

山路塔

仕名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山路ニ  
 在ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナレハ



テ大和ノ故宮ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ六路塔  
モ落花モ同ク春ニ用タレトモ各ハ例ノ賞讃  
村脩ノ雪ニ結トモ落塔ハ冬ト定レ然ツトモ  
落花ハ漢ニ西見鴻カ春自雪ノ詩ヨリ春ト云ハシ  
モ宣ナレト其各ハ指テ俳諧ノ用ナシ落塔ハ但  
春ニシテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜

モ各ハ俳諧ノ自在ニシテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ  
カモフリト訓ニ喚テ中古ハ總テ秋季ト成セリ  
去レト幸ニ冬ノニ子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ  
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定メナリ

雪海

モ各ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云キナリモ物ハ  
北越ノ各産ニシテ海鳥ノ山石間ニ降積ス  
ル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海苔ト成レリ  
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ白ヲ青ト云ハ美訓  
ナラン〇今ハ梅スニ海苔ノ各ハ春甘夏ト海苔レハ  
雪海苔ト以テ冬ト成サハ例ノ愛護ニ及ハスシテ  
モ等ヲ加減ノ當用ト云ハシ

大根引

モ詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ音詔ニ  
讀ハシ京家ノ大根引ニ效フ一カラス牛ニ房  
モ同シ各數ナカラ引ト云ハスシテ堀ト云フ其各



八秋ト知キナリ○今按スルニ侘諧ノ式同ハ新式ニ據  
ラス古抄ヲヲ遜ス今ヲ日ノ世法ニ遠子ハ其ハ座ニ儘  
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其後ヲ明メテ自己  
ノ理ニ出ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ血氣議ト知り  
其所ヲ百世ノ明監ト知キナリ

車丈七云け式の詠用と始よ節の食の公式より  
終よ大振りの俗習よりおのれを回す余條あり  
て或ハ連音の有用あり 詠諧の可く用せり  
一或ハ古今の遠同とことなり或ハ季の節の  
加減とことあり平養とけ式とより千式

一方法の凡例きくんを我とくくを階級首の微中  
を失くして一筆万通の機要よりけ式の序詞  
よりの字達の人となえりいて季女く四も子の  
名れとありいさくを侘諧の誤不誤と侘諧の  
用す月もさへ角てけ式と格削より自己のるれ  
といろきんよん百世の感とをるにめちる

○ 侘諧と假名はくひ世事

大和と假名遣とよすを定る承々の物ねき  
てら作らるる法ありとてやと書ハ紹巴の







真名と此配<sup>レ</sup>と辨<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ふ。の多<sup>ク</sup>ある<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>と  
 いあつ<sup>レ</sup>ふさむ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>とき<sup>レ</sup>假名<sup>ハ</sup>む<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>子<sup>ハ</sup>れ  
 とら<sup>レ</sup>ふと假名書<sup>ノ</sup>押<sup>レ</sup>又<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>書<sup>ハ</sup>法  
 の字<sup>ハ</sup>假<sup>カ</sup>く<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>カ</sup>さ<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>也  
 を<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>例<sup>ノ</sup>  
 な<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>似<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>假名<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>  
 の口<sup>ハ</sup>扱<sup>キ</sup>と<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>知<sup>キ</sup>も<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>文<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
 ち<sup>ハ</sup>一<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>信<sup>キ</sup>一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>語<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ち<sup>ハ</sup>一<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>繕<sup>キ</sup>一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ち<sup>ハ</sup>一<sup>レ</sup>  
 の信<sup>ハ</sup>繕<sup>キ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>字<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>て

字<sup>ハ</sup>假<sup>カ</sup>の<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>流<sup>ハ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>文<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>語<sup>ハ</sup>と  
 一<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>訓<sup>ハ</sup>異<sup>レ</sup>用<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>假<sup>カ</sup>名<sup>ハ</sup>遣<sup>ハ</sup>あり<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>上<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>用<sup>キ</sup>ひ<sup>レ</sup>中<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>用<sup>キ</sup>ひ  
 下<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>用<sup>キ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>月<sup>ハ</sup>も<sup>レ</sup>ね<sup>レ</sup>假<sup>カ</sup>名<sup>ハ</sup>遣<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也  
 い<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>相<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>づ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>子<sup>ハ</sup>と  
 新<sup>レ</sup>制<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>假<sup>カ</sup>名<sup>ハ</sup>遣<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>沙<sup>ハ</sup>汰<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>  
 一<sup>レ</sup>古<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>理<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>字<sup>ハ</sup>文<sup>ハ</sup>  
 の<sup>レ</sup>輝<sup>ハ</sup>力<sup>ハ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>已<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>耻<sup>キ</sup>一<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>人<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ぬ  
 と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>例<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>衆<sup>ハ</sup>議<sup>ハ</sup>より  
 例<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>明<sup>ハ</sup>筈<sup>ハ</sup>よ<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>例<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>衆<sup>ハ</sup>議<sup>ハ</sup>より  
 一<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>もの<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>沙<sup>ハ</sup>汰<sup>ハ</sup>也



い  
ひ  
る

い  
ま  
く  
い  
ふ

鯉  
類  
魚  
類

鹽

きしるゐの器の時也  
或はあひひと

紅

くまふも  
又と井

任

任 任のまことすまゐるとも  
任 任のまことすまひとも

侍

あつた  
さげひ

眠

寐 寐のまことすまひとも  
寐 寐のまことすまひとも

侍

あつた  
さげひ

此

此 此のまことすまひとも  
此 此のまことすまひとも

音

音 音のまことすまひとも  
音 音のまことすまひとも

いれを故実也

い  
ふ  
い  
ふ

東花云古法よりの説さうといま  
いふへの二用よりしきまゝいふまゝいふ

と通ひるいふとふよ通ふ故也  
音通といふへと唇の二音よ通ふといま  
くと唯牙の二音よ通ひ或は唇を  
とよと齒音の二通ふていふ千の  
音をまゝとけきくくの豊よと定ま  
これら大和の國曲よと北字よと  
まの助勅おのれい我々のま  
北字はとまといひはまもも折  
和訓よとまを耻とらふ一  
いふといふのまゝとく廻とま  
北字



とふと假名も又向と言語とに勤く  
勤くぬ款ありて物名をよきなり勤く  
鯛鯉のおとつめの子やまうの言葉離の  
おしお外く物名あれと假名も  
次と書とつはありて言葉をおおいと  
まをあらまう日就とあらぬよ  
唇音の次と書あり離の因かあ假名  
あれといへる音書の次と書あり但し  
次と書と歌書とより離とおとるま  
ふのふとち初と中めとあれとおふの

おとあつめのおとやとん假名も勤くと  
勤くぬとけおと教ふあれと言語と勤き  
又向と勤くとまうのきとあつめ  
のこまもそまうけ例よまうとせつふむ  
下の五品は古書の假名はくひと散在  
いふたをりまなまうん△獨權とら假名  
はくひとおと又向と言語とに或は勤く  
と勤くぬと或は書ると書くぬと或は  
上中下と用ると或は押重とま心後と  
或は口傳と故実とまなれ假名はくひ











と申下は用やとく。との字は申す用ひ  
 ありとあられとあられ。これのおもあられ  
 とと申す。て書はあ。けお。持。あ。い。假名  
 こそし。或。あ。ま。る。は。ら。る。の。れ。も。ま。ま。あ。て  
 づ。の。ら。ま。と。用。ゆ。へ。一。或。と。ん。へ。ゆ。か。ん。ま。あ  
 お。も。ん。ま。し。ゆ。た。と。ん。と。字。形。こ。ろ。一。お。れ  
 と。書。法。の。く。ま。ら。さ。く。假。名。の。は。く。ま。も  
 子。あ。れ。い。け。お。と。け。例。よ。考。一。は。れ。も  
 ち。は。の。假。名。は。ら。い。よ。な。ま。は。は。さ。ハ。重。あ。は  
 録。の。れ。と。い。う。ち。ら。な。も。知。く。い。れ。

○ ○ ○  
え へ 五

と。申。す。て。い。ふ。字。あ。ら。れ。例。の。家。議。よ。り。一。也  
 消キエ キエ キエ 杖ツエ 魚イサ 木キ け。け。の。え。の。ま。し  
 更カヘ カヘ カヘ え。ゆ。へ。の。業。と。く。和。あ。ぬ。実。也  
 声コエ コエ コエ 指ササユ 或ハ ハ ハ 本ホ ホ ホ 葉エフ エフ エフ  
 東。老。云。え。の。ま。し。を。む。い。り。論。あり。て。い。ふ  
 と。や。分。め。あ。ら。し。と。申。え。と。し。縮。え。と。し。衣。え  
 と。い。ふ。也。申。す。と。と。ゆ。え。る。と。申。す。あ。り。て  
 二。音。通。よ。う。な。也。縮。え。と。し。と。し。ゆ。め。の。字。形  
 と。い。ひ。お。え。と。し。と。し。字。形。訓。也。或。い。ふ。え  
 と。い。ふ。名。あ。れ。と。し。と。し。申。す。て。實。字。あ。ん







蓮ニ云世ノ假名はるゝものありて古名  
はるゝものありて新名の新制あり  
はるゝの假名直名はるゝものありて大和詞  
助語とやうけて能讀の文章は未だ條々  
ありたりきりり▲之接もたけ温鶴を和子庵  
の遺稿より取りて彼より五秘の二子色むし  
え祿甲成の和子や伊賀北西蘇庵より取りて  
後撰其の撰集の序に「其のなめり文  
稿ととりりて十卷篇の點換ありてり  
前撰其の直名文より幻住庵記よりり

免三(三)楚の文論ありて略云我が所て能讀  
の文章と和歌連音よりありて家より格  
ありたりと云ふは漢より四六の文にありて拍子  
の律と階格ありと云ふれは能讀の平話あり  
例の古名各ありと云ふをきくとくは能讀也  
形容より上と能讀の羽の如く下と錯綜の版  
と能讀よりと云ふ和歌もあつて連音よりと云  
ふは一ノ新名源中挾衣の艶ある詞より  
似し能讀ん云ふれとも今世文論より直名各より  
返り返りぬの差ふあれいきていひてり同











